

「二ひきのかにの子どもらが、青白い水の底で話していました。」
 「クラムボンは笑ったよ。」
 「クラムボンはかぶかぶ笑ったよ。」
 「クラムボンははねて笑ったよ。」
 「クラムボンはかぶかぶ笑ったよ。」
 上の方や横の方は、青く暗く鋼のように見えます。そのなめらかな天井を、つぶつぶ暗いあわが流れていきます。
 「クラムボンは笑っていたよ。」
 「クラムボンはかぶかぶ笑ったよ。」
 「それなら、なぜクラムボンは笑ったの。」
 「知らない。」
 つぶつぶあわが流れていきます。かにの子どもらも、ぼつぼつぼつと、続けて五、六つぶあわをはきました。それは、ゆれながら水銀のように光って、ななめに上の方へ上つていきました。
 つつと銀の色の腹をひるがえして、一ひきの魚が頭の上を過ぎていきました。
 「クラムボンは死んだよ。」
 「クラムボンは殺されたよ。」
 「クラムボンは死んでしまったよ……。」
 「殺されたよ。」
 「それなら、なぜ殺された。」
 兄さんのかには、その右側の四本の足の中の二本を、弟の平べったい頭にのせながら言いました。
 「分からない。」
 魚がまたつつともどつて、下の方へ行きました。
 「クラムボンは笑ったよ。」
 「笑った。」
 にわかにはつと明るくなり、日光の黄金は、夢のように水の中に降ってきました。波から来る光のあみが、底の白い岩の上で、美しくゆらゆらのびたり縮んだりしました。あわや小さなこみからは、まっすくなかげの棒が、ななめに水の中に並んで立ちました。
 魚が、今度はそこらじゅうの黄金の光をまるつきりくちやくちやくにして、おまけに自分は鉄色に変に底光りして、また上の方へ上りました。
 「お魚は、なぜあ行ったり来たりするの。」
 弟のかにが、まぶしそうに目を動かしながらたずねました。
 「何か悪いことをしてるんだよ。取ってるんだよ。」
 「取ってるの。」
 「うん。」
 そのお魚が、また上からもどつてきました。今度はゆっくり落ちて着いて、ひれも尾も動かさず、ただ水にだけ流されながら、お口を輪のように円くしてやってきました。そのかげは、黒く静かに底の光のあみの上をすべりました。
 「お魚は……。」
 そのときです。にわかには天井に白いあわが立つて、青光りのまるできらきらする鉄砲だまのようなものが、いきなり飛びこんできました。
 兄さんのかには、はつきりとその青いものの先が、コンパスのように黒くとがっているのを見ました。と思ううちに、魚の白い腹がざらつと光って一ぺんひるがえり、上の方へ上つたようでしたが、それつきりもう青いものも魚の形も見えず、光の黄金のあみはゆらゆらゆれ、あわはつぶつぶ流れました。
 「二ひきはまるで声も出さず、居すくまってしまいました。」
 お父さんのかにが出てきました。
 「どうしたい。ぶるぶるぶるえているじゃないか。」
 「お父さん、今、おかしなものが来たよ。」
 「どんなもんだ。」
 「青くてね、光るんだよ。はじが、こんなに黒くとがってるの。それが来たら、お魚が上へ上つていったよ。」
 「そいつの目が赤かったかい。」
 「分からない。」
 「ふうん。しかし、そいつは鳥だよ。かわせみといつんだ。だいじょうぶだ、安心しろ。おれたちはかまわなからだから。」
 「お父さん、お魚はどこへ行ったの。」
 「魚かい。魚はこわい所へ行った。」
 「こわいよ、お父さん。」
 「いい、いい、だいじょうぶだ。心配するな。そら、かばの花が流れてきた。くらんきれいだろつ。」
 あわといっしょに、白いかばの花びらが、天井をたくさんすべってきました。
 「こわいよ、お父さん。」
 弟のかにも言いました。
 光のあみはゆらゆら、のびたり縮んだり、花びらのかけは静かに砂をすべりました。

かにの子どもらはもうよほど大きくなり、底の景色も夏から秋の間にすっかり変わりました。
 白いやわらかな丸石も転がってき、小さなきりの形の水晶のつぶや金雲母のかけらも、流れてきて止まりました。
 その冷たい水の底まで、ラムネのびんの月光がいつぱいにすき通り、天井では、波が青白い火を燃やしたり消したりしているよう。辺りはしんとして、ただ、いかに遠くからというように、その波の音がひびいてくるだけです。
 かにの子どもらは、あんまり月が明るく水がきれいなので、ねむらないで外に出て、しばらくだまつてあわをはいて天井の方を見ていました。
 「やっぱり、ぼくのあわは大きいね。」
 「兄さん、わざと大きくはいてるんだい。ぼくだつて、わざとならもつと大きくはけるよ。」
 「はいてごらん。おや、たつたそれきりだろつ。いいかい、兄さんがはくから見えておいで。そら、ね、大きいだろつ。」
 「大きないや、おんなじだい。」
 「近くだから、自分のが大きく見えるんだよ。そんならいつしよにはいてみよう。いいかい、そら。」
 「やっぱりぼくのほう、大きいよ。」
 「本当かい。じゃ、も一つはくよ。」
 「だめだい、そんなにのび上がっては。」
 また、お父さんのかにが出てきました。
 「もうねろねろ。おそいぞ。あしたイサドへ連れていかんぞ。」
 「お父さん、ぼくたちのあわ、どっち大きいの。」
 「それは兄さんのほうだろつ。」
 「そうじゃないよ。ぼくのほう、大きいんだよ。」
 弟のかには泣きそうになりました。
 そのとき、トブン。
 黒い丸い大きなものが、天井から落ちてずうつとしずんで、また上へ上つていきました。きらきらつと黄金のぶちが光りました。
 「かわせみだ。」
 子どもらのかには、首をすくめて言いました。
 お父さんのかには、遠眼鏡のような両方の目をあらん限りのばして、よくよく見えてから言いました。
 「そうじゃない。あれはやまなしだ。流れていくぞ。ついていつてみよう。ああ、いいにおいだな。」
 なるほど、そこらの月明かりの水の中は、やまなしのいいにおいでいっぱいでした。
 三ひきは、ぼかぼか流れていくやまなしの後を追いました。その横歩きと、底の黒い三つのかげ法師が、合わせて六つ、おどるようにして、やまなしの円いかけを追いしました。
 間もなく、水はサラサラ鳴り、天井の波はいよいよ青いほのおを上げ、やまなしは横になって木の枝に引っかかつて止まり、その上には、月光のじがもかも集まりました。
 「どうだ、やっぱりやまなしだよ。よく熟している。いいにおいだろつ。」
 「おいしそうだね、お父さん。」
 「待て待て。もう二日ばかり待つとね、こいつは下へしずんでくる。それから、ひとりでおいしいお酒ができるから。さあ、もう帰つてねよう。おいで。」
 親子のかには三ひき、自分らの穴に帰っていきます。
 波は、いよいよ青白いほのおをゆらゆらと上げました。それはまた、金剛石の粉をはいてるようでした。

私の幻灯は、これでおしまいであります。